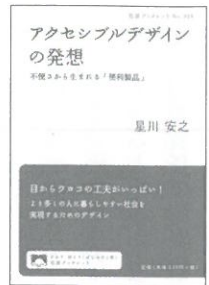




「この子どもたちが遊べる市販のおもちゃが少ないよね」とポツリと療育士が言うのを聞いたのは東京・世田谷の重症心身障害児通園施設「あけぼの学園」。今から39年前のことです。当時学生だった私に療育士のその言葉は数学の応用問題のように聞こえ、これは面白そう！ なんとか解いてみたいと思ったのが今の仕事をするきっかけになっています。

ちょうど就職を決める時期でもあり、玩具メーカーに「障害児のおもちゃを作りたい」と面接に行ったところ、「今はそのような部署はないが、将来そのような部署ができるかもしれない」との言葉を信じ入社、半年後そのような部署が新設され配属されました。

玩具開発の技術は社内の先輩に教わりながら、障害にかんしては外部の教育、療育、研究機関、そして家庭訪問をくりかえし、多くを学びました。1年間で約1000人のさまざまな子どもたちに会った結果は、「すべての子どもたちが遊べる玩具は理想だけれど不可能に近い」でした。けれども「メーカーは研究だけでなく玩具を作ることが役目」を社内で確認。対象を目の不自由な子どもにしほりモニターをくりかえし作ったのは、メロディが30秒鳴り続けるボールや、さわって状況を確認できるゲームでした。日本点字図書館用具部での販売を通じ、盲児のいる家庭や施設に広がりました。そのまま順調に進み始めたとき、プラザ合意による円高で事業の縮小が行なわれ、私の仕事も5時まででは一般玩具の開発、5時以降に障害児の玩具の開発をするように変わりました。大部屋に移った私のとなりでは、同僚がゲーム盤を試作していました。「このままでは、視覚障害者は遊べないけれど、小さな凸点を付けば遊べるようになる」と思い、それを彼に話すと5分後には視覚障害者も遊べるものに生まれ変わっていました。これが、目が見える見えないにかかわらず共に遊べる共遊玩具（共用品）の出发点となり、その基準づくり



岩波ブックレットNo.939
『アクセシブルデザインの
発想—不便さから生まれる
「便利製品」』
星川安之 著 本体520円+税

「共用品」という言葉が いらなくなる日をめざして

公益財団法人 共用品推進機構
専務理事 **星川安之** さん

が始まり、それは玩具業界に広がり、世界の玩具協会にも広がりました。

当時、共遊玩具を購入された盲児のお母さんから会社あてに手紙が届きました。そこには、「障害をもつ子どものおもちゃとなると、教材屋さんの特注するのが今まででした。それが、普通のおもちゃ屋さんですぐに手にできた幸せ、分かってもらえますか？」と書かれていました。このとき、冒頭の療育士が言った「市販の玩具」の「市販の」の意味が解けた気がしたのです。

1991年、玩具以外にも障害の有無、そして年齢の高低などにかかわらず共に使える製品やサービスを「共用品・共用サービス」と名付け、その普及をおこなう市民団体を立ち上げました。37年たった今は、公益財団法人として、不便さ・良かったこと調査、不便さ解決の検討と日本工業規格（JIS）や国際規格（IS）の作成と事務局、そして展示会やデータベースなどを通じての普及をおこなっています。市販製品のほぼすべてが共用品となり、その言葉自体がいらなくなる社会になったとき、冒頭の応用問題の答案用紙を提出できます。一日でも早く、その答案を関係するみんなで提出したいと思っています。

ほしかわ やすゆき / 1957年、東京生まれ。1980年、自由学園最
高学部卒業。1980年トミー工業（現 タカラトミー入社）、1991年E&C
プロジェクト、1999年、共用品推進機構に所属し共用品の普及に従事、
現在に至る。